

## 成人看護学実習に向けての事前学習・演習の実際と今後の課題

— 実習担当施設での検討 —

掛屋 純子\*・逸見 英枝

看護学部看護学科

(2011年11月22日受理)

本研究の目的は、成人看護学実習前に行う、C病院実習における事前学習および演習の実際と今後の課題を明らかにすることである。2011年度A短期大学看護学科の成人看護学実習C病院で実習を行った前期実習終了者3年次生22名に事前学習・演習についてのアンケート調査を行った。その結果、事前学習は学生が受け持つ患者の疾患（心不全・脳梗塞・糖尿病）の学習が多く、また技術に関する事前学習も疾患に関連したものであった。さらに演習内容では輸液の演習が多く、寝たきり患者の清拭や足浴などの応用技術に関しては半数程度にとどまっていた。実習後、応用技術について実施しておけばよかったとの記述もあった。以上のことから、事前学習のオリエンテーション時に患者のイメージを持たせた応用技術の演習内容の指導や効果的な演習内容について検討する必要性があることが考えられ、今後の課題となった。

### はじめに

看護教育の内容と方法に関する検討会報告書<sup>1)</sup>では、「学生は、臨地実習において講義や演習で学んだ知識を統合して個別の対象者に合わせて看護を提供できるようになることが期待される」としており、学生の臨地実習は実際の看護実践をとおして知識の統合が促進されるものであり、看護基礎教育の中でも大きなウエイトを占めている。

成人看護学実習では、これまで学んだ知識・技術を復習し臨地実習に備えることを目的とし、実習前に事前学習・演習を行っている。これらの事前学習してほしい内容および、演習の進め方および内容については、全体オリエンテーションの中で説明し、さらに実習開始1週間前には事前学習および演習に関するオリエンテーションを各実習施設で実施し、学生が主体的に取り組むように指導している<sup>2)</sup>。しかし、学生はオリエンテーションの内容を十分に理解し、実施できているかどうかは、明らかにされていない。

筆者らが担当しているC病院実習では、受け持つ患者の特徴として、心不全や脳梗塞などの寝たきりの患者が多く、寝たきりで点滴や尿道留置カテーテルを挿入された患者の清拭や更衣、拘縮のある患者の手浴・足浴などの応用技術が必要とされ、看護技術を提供する前のイメージ化や実践時の工夫が求められる。事前学習・演習のオリエンテーションでは、このような患者のイメージを持って演習をするように指導しているが、臨地実習で学生は、点滴や尿道留置カテーテルが挿入された寝たきり患者の援助や予想以上

の拘縮により援助に戸惑うことが多く、実習施設からも学生の演習の強化してほしい内容として指摘されている。そこで今回、成人看護学実習前に行う、C病院実習における事前学習および演習の実際と今後の課題について検討したので報告する。

### I. 研究目的

成人看護学実習前に行う、C病院実習における事前学習および演習の実際と今後の課題を明らかにする。

### II. 成人看護学実習（A・B）の事前学習および演習について<sup>2)</sup>

#### 1. 3年生に向けての全体オリエンテーション

成人看護学実習（A・B）開始前の4月、成人看護学実習オリエンテーションにて、3コマ（6時間）を利用し、臨地実習を履修する3年生全員に向けて「成人看護学実習ガイダンス」を実施している。

ガイダンスの内容は、実習要綱に基づき成人看護学実習の目的・目標、対象理解や各健康レベルにおける看護などの実習内容や、実習の進め方や事前学習・演習の方法、医療安全に関すること、また記録の記載方法など実習内容について成人看護学担当教員により説明している。

「事前学習・演習」については、別紙資料「事前学習および演習の目的」に基づき「事前学習・事前演習の目的」、「演習の進め方」、「演習内容」等、説明し、これらの事前

\*連絡先：掛屋純子 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

学習および演習については学生が自主的に実施するよう指導をしている。

## 2. 事前学習・演習のオリエンテーション

事前学習・演習オリエンテーションは、成人看護学実習（A・B）開始1週間前に、各実習病院（2011年度は4施設8病棟）で各病院担当の教員が実施している。事前学習・演習は、1コマ（2時間）を使用しているが、患者説明の直前のオリエンテーションにおいても1コマ（2時間）を使用し、受け持ち患者に沿って特に必要とする事前学習の内容や、どのような演習をしていくことが大切かのポイントを押さえながら説明している。

今回、調査対象としたC病院実習の事前学習・事前演習の内容は、実習病院の急性期病棟・慢性期病棟の特徴、入院患者の疾患および特徴、それらの疾患や特徴を踏まえた事前学習や演習の実施を説明している。特に患者のイメージを持った事前演習を行うよう指導している。これらのC病院実習における事前学習・演習の内容については、実習開始前の打ち合わせ時に病院の特徴上、学習しておいて欲しい疾患や患者の特徴を踏まえた演習内容について、実習病院の実習指導者と協議し、学生へ提示している。

## 3. 演習の実施

演習オリエンテーションを受けた後、実習グループの学生は、事前学習・学内演習のスケジュール表をグループごとに作成し、担当教員に提出する。学生は作成したスケジュール表に沿って寝衣交換や清拭、移乗など基本的な援助技術についての学内演習を自主的に進め、必要時教員の指導を受けている。身体侵襲の高い技術である注射および点滴静脈注射については、教員の指導のもと実施している。

## 4. C病院の特徴

C病院では実習病棟として2病棟を使用している。1病棟は急性期病棟（混合病棟）であり、内科では脳梗塞・脳出血、がんターミナル、心不全や呼吸不全、糖尿病の患者が多い。外科では主に消化管疾患が多いがC病院では手術は行っておらず、術後の経過観察が必要な亜急性期の患者が多い。また眼科では白内障の術前・術後が多い。

2病棟は、慢性期病棟であり慢性疾患、呼吸不全、脳梗塞・脳出血で意識レベルやADLの低下した患者が多い。比較的症状の落ち着いた患者が多いが急変すること多いのが特徴である。両病棟とも全体的に高齢の患者が多く、認知症やコミュニケーション障害のある患者が多い。

以上のC病院の特徴から、事前学習・演習のオリエンテーションでは、疾患については脳梗塞、脳出血、癌ターミナル、心不全、呼吸不全、糖尿病、消化器の術後、認知症などを学習するように説明をしている。また、演習内容については、呼吸音、腹鳴、心電図、SPO<sub>2</sub>と動脈血ガス分析との関係、吸引、ガーゼ交換、点滴準備、経管栄養（レビン・ED・胃瘻）、低圧持続吸引などの基本的な看護技術に

加え、寝たきり状態で、麻痺があり膀胱留置カテーテルと輸液をしている患者の寝衣更新・清拭や、麻痺や拘縮のある患者の移乗、手浴、足浴などイメージをもって演習を行うよう説明している。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

2011年度A短期大学看護学科の成人看護学実習C病院で実習を行った前期終了者3年次生22名

### 2. 調査期間

平成23年5月～7月

### 3. 調査方法

実習終了日に自記式質問紙を配布し、アンケート回収は留め置き法とした。

### 4. 調査内容

成人看護学実習C病院の事前学習および学内演習の実施状況と実施しておけばよかった項目、自己評価など調査した。

### 5. 用語の定義

事前学習・演習の「事前」とは、実習開始前にとどまらず、実習期間中を通しての学習・演習も含める。

### 6. 倫理的配慮

対象者に調査票を配布時、研究の目的、無記名であり個人は特定されないこと、調査協力は自由意志であること、教育研究に使用するが実習評価には無関係であることなど書面および口頭にて説明した。

## III. 結果

成人看護学実習C病院前期実習終了者3年次生22名に配布し、回答が得られたのは18部（回収率81.2%）であった。

C病院における実習で学習しておいて欲しい疾患・演習内容については、C病院の実習指導者と協議し事前学習のオリエンテーション時に実習病院の特徴も踏まえ提示している。

### 1. 実習病院における疾患についての事前学習の実施結果

学生が実際に事前学習したと答えた疾患は、心不全が11

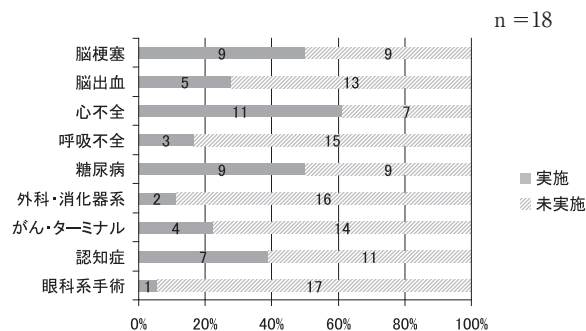


図1 実習病院における疾患についての事前学習の実施結果

人 (61.1%)、次いで脳梗塞が9人 (50.0%)、糖尿病が9人 (50%)、認知症が7人 (38.9%)、脳出血が5人 (27.8%)、がん・ターミナルが4人 (22.2%)、呼吸不全が3人 (16.7%)、外科・消化器系疾患が2人 (11.1%)、眼科系手術が1人 (5.6%) であった (図1)。

## 2. 実習病院における基本的看護技術に関する事前学習の実施結果

学生が実際に事前学習したと答えた技術に関する項目は、呼吸音聴取が14人 (77.8%)、経管栄養が12人 (66.7%)、SPO<sub>2</sub>と動脈血ガス分析との関係についてが11人 (61.1%)、吸引が9人 (50.0%)、腹鳴音聴取およびバルーンカテーテルについてがそれぞれ6人 (33.3%) であった。中心静脈栄養についてが5人 (27.8%)、低圧持続吸引が3人 (16.7%)、12誘導心電計が3人 (16.7%)、ガーゼ交換が2人 (11.1%)、指定された VTR 視聴をしたものが2人 (11.1%)、点滴についてが1人 (5.6%) であった (図2)。

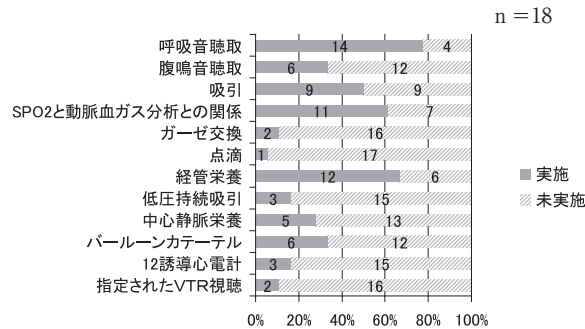


図2 実習病院における基本的技術に関する事前学習の実施結果

## 3. 実習病院における基本的技術に関する演習の実施結果

学生が実際に事前演習したと答えた技術に関する項目は、点滴注射の準備が18人 (100%)、呼吸音聴取が14人 (77.8%)、経管栄養が12人 (66.7%)、吸引が9人 (50.0%)、腹鳴音聴取およびバルーンカテーテルの演習についてがそれぞれ6人 (33.3%)、中心静脈栄養についてが5人 (27.8%)、低圧持続吸引が3人 (16.7%)、ガーゼ交換が2人 (11.1%) であった (図3)。

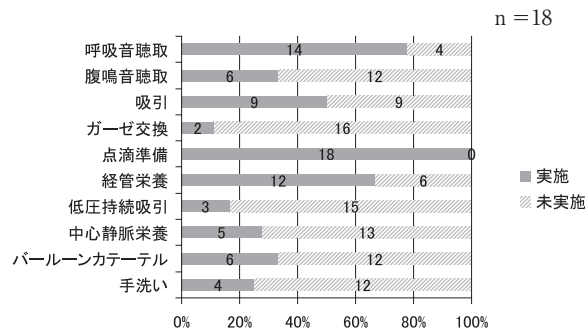


図3 実習病院における基本的技術に関する演習の実施結果

## 4. 実習病院における応用技術演習の実施結果

学生が実際に事前演習したと答えた応用技術演習に関する項目は、麻痺のある患者の移乗が12人 (66.7%)、麻痺のある患者の手浴および足浴がそれぞれ9人 (50.0%)、寝たきり患者の寝衣更新・清拭および輸液・尿道留置カテーテルのある患者の寝衣交換がそれぞれ7人 (38.9%) であった (図4)。

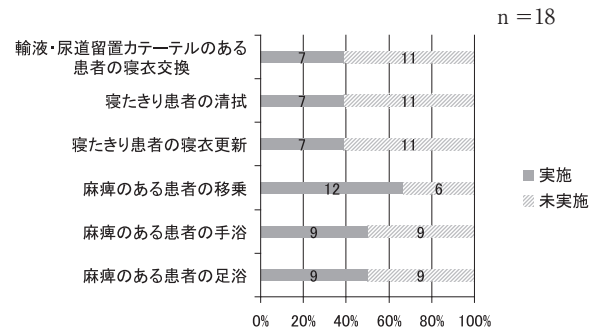


図4 実習病院における応用技術演習の実施結果

## 5. 実習後、演習が必要だった項目

実習を終えて学生が演習は必要だったと答えた内容 (自由記載) については、全身清拭、おしめ交換、陰部洗浄の実施方法、口腔ケアなどの基本的看護技術、急変時の対応・看護、中心静脈栄養、吸引の演習、経管栄養の演習、胃瘕についての学習、麻痺のある患者の手浴・足浴、麻痺および拘縮のある患者のポジショニングについて、点滴をしている患者の寝衣交換、麻痺や拘縮のある患者の車いす移乗、片麻痺のある患者の血圧測定など自分の受け持ち患者に必要な援助についての練習、輸液準備、輸液の滴下速度の計算・輸液の管理、SPO<sub>2</sub>、各種検査などの基本的知識、疾患について解剖から学習する必要があったなど学生は答えていた。

## 6. 事前学習・演習への主体性の有無

担当教員は、実習グループの学生に、事前学習・演習のオリエンテーションの後、立案をさせている。そしてスケジュール表に基づいて、グループメンバー1人1人が協力し合い自ら主体的に事前学習・演習を進め、必要時教員と演習を行うよう指導している。学生の事前学習・演習への主体性について有無を訊ねた。

事前学習に主体的に取り組めたかという問いに対して「はい」と答えたものは15人 (83.3%)、「いいえ」と答えたものは3人 (16.7%)、事前演習に主体的に取り組めたかという問いに対して「はい」と答えたものは18人 (100%) であった。

## IV. 考察

1. 疾患および基本的看護技術に関する事前学習の実施結果  
学生が事前学習した疾患としては、心不全、脳梗塞、糖

尿病が半数以上を占め、また約40%の学生が認知症についての学習をしていた。C病院では、心不全や脳梗塞の患者が多く、また専門外来として糖尿病外来が設けられ、教育入院の患者も多く、さらに原疾患以外に認知症のある患者も多い。このような実習病院の背景から、学生は担当する受け持ち患者の疾患が決定した時点より疾患についての事前学習を行い実習に向けた準備をしていることが考えられる。事前学習の必要な疾患として心不全や脳梗塞についての学習をするよう説明しているが、教員としては解剖生理や発生機序なども含めて学習するのが当然だと考えて説明していることから、学生には解剖・病態生理まで十分事前学習するように説明が必要であったことも考えられる。また、基本的看護技術に関する事前学習については呼吸音聴取、経管栄養を学生の7割以上が、SPO<sub>2</sub>と動脈血ガス分析との関係、吸引については5割以上の学生が事前学習をしていた。

呼吸音聴取および SPO<sub>2</sub>については、心不全の疾患患者が多いことに関連や、事前学習・事前演習のオリエンテーション時に「呼吸音聴取トレーニング」の MD と資料を渡し学生に必ず事前学習するように提示していることから事前学習の実施率が高かったことが考えられる。

経管栄養については、脳血管疾患が多いことから受け持ち患者が嚥下障害によりレビチューブや胃瘻増設になどによる経管栄養を実施しており、事前学習の必要性があったことが考えられる。また、レビチューブの挿入による機械的刺激から気道浄化が低下し吸引処置の必要とする患者、レビだけでなく意識レベルの低下した患者を受け持つことが多かったことから吸引の事前学習の実施につながったと推測される。一方、12誘導心電計、ガーゼ交換については実施率が低く、学生の受け持ち患者の必要性がない項目であったことが考えられる。VTR 視聴についても低く、効果的な事前学習・演習に役立てるために患者の必要性に沿った VTR を効果的に活用するよう提示することが求められる。上山ら<sup>3)</sup>は、臨地実習前に事前演習を取り入れた効果として具体的イメージを取り入れることにより、短期間の実習においても要点をとらえた実習が行えると述べている。成人看護学実習もカリキュラムの改正により、2010年度までは各4単位4週間であった成人看護学(A・B)も2011年度は3週間3単位となり、以前より短期間の実習となった。短期間でより要点をとらえた実習を行うために、教員が学生に抱かす具体的イメージは今まで以上に重要であり、効果的な VTR の活用によりイメージづくりを促すことや疾患と必要とする基本的看護技術の関連性、担当病院の特徴を踏まえたオリエンテーションの必要性が求められる。

## 2. 基本的看護技術および応用技術演習の実施結果

学生が実際に事前演習したと答えた技術に関する項目では、呼吸音聴取や経管栄養、吸引は事前学習の実施率と同様の結果であったのに対し、点滴注射の準備についての事

前学習では1人であったのに対し事前演習では18人であった。このことから演習には、基礎的知識や技術の確認が当然あると考えていたが学生には具体的勉強の仕方についても説明しないと実施できないことが考えられた。C病院では、成人看護学実習の学生に点滴注射の準備を実際に体験する機会を設けている。そのため学生の技術が不十分であると感染のリスクや薬剤管理の面からもリスクを伴う高度な技術であることから十分な演習の必要性が求められる。事前学習・演習のオリエンテーション時に学生には、点滴の準備を実際体験することを説明していることから演習の実施は全員で100%であったが、演習をする以前の事前学習についてが1人であったことから、点滴準備の事前学習への意識の低さが考えられた。上山ら<sup>4)</sup>は、点滴の援助について演習で繰り返し体験し、予め危険性を知っておく必要性について述べている。したがって点滴準備の基本的な知識を得たうえでの清潔操作の必要性や薬剤の投与ミスなどを防止する確認の必要性など具体的な医療安全および看護管理についても意識づけながらの事前学習・演習のオリエンテーションが必要と考える。

呼吸音聴取や腹鳴聴取などは、呼吸音聴取トレーニングに加え、学内にある呼吸音や心音、腸音など聴取することが可能なシミュレーションモデルの活用していたことから実施率が高かったことが考えられる。しかし、実際学生は聴取ただけでフィジカルアセスメントまでは実施していない。本学のシミュレーションモデルは患者設定により呼吸音や心音、腸蠕動音なども設定でき患者のフィジカルアセスメントに役立つものである。学内でシミュレーション等を行い臨地実習に向けて準備することで効果的に技術を習得することが可能である<sup>1)</sup>といわれるように、この機能を活用し学生の演習の効果を高めることも必要であったと考える。

応用技術演習に関する項目は、麻痺のある患者の移乗、麻痺のある患者の手浴および足浴について5割以上の学生が実施していた。また、寝たきり患者の寝衣更新・清拭および輸液・尿道留置カテーテルのある患者の寝衣交換は約4割の学生が実施していた。これらの項目は実習開始前の実習施設での打ち合わせで学生に強化してほしい内容として実習指導者側からの意見として提示されていた項目であった。しかし、実際学生は麻痺のある患者の移乗、麻痺のある患者の手浴および足浴について演習したものが5割であり残りの学生は未実施であった。実際に未実施であったために、実習後、演習が必要だった項目の回答の中にこれらが記載されていた。このことから、事前学習・演習のオリエンテーションで動機づけをいかに行うかが課題となる。今回の事前学習・演習のオリエンテーションでは、患者のイメージが可能な説明をしていたが、今後は麻痺のある患者や拘縮のある患者のイラストや VTR を活用しながら学生に提示していく必要がある。

### 3. 実習後に学生が必要だと答えた演習の項目

学生は、実習を終えて、全身清拭、おしめ交換、陰部洗浄の実施方法、口腔ケアなどの基本的看護技術の必要性を感じていた。これらの基本的看護技術は、実習期間中ほとんどの学生が経験またはケアとして実施が必要な看護技術であり、C病院では心不全や脳梗塞によりADLの低下した患者が多いことから基本的看護技術の必要性の高さが考えられる。また、急性期から安定した時期であっても、逆に慢性期の病棟であっても急変することがあり、急変時の対応・看護の事前学習や演習の必要性があったと記載した学生もいた。学生の中にはがん・ターミナルの患者を受け持つこともあり急変時の対応だけでなく死へ向かう人の援助や家族への配慮などの学習も患者の状態や実習の進捗とあわせて行うよう促す必要もあると考える。さらに教員は、がん・ターミナルの患者を受け持つ学生がいることから、事前学習に死に向かう患者の看護の提示が必要であった。

麻痺のある患者の手浴・足浴、麻痺および拘縮のある患者のポジショニングについて、点滴をしている患者の寝衣交換、麻痺や拘縮のある患者の車いす移乗、片麻痺のある患者の血圧測定など自分の受け持ち患者に必要な援助についての練習などは、学生のイメージ作りが不十分であったことがうかがえ、前述のようなオリエンテーションの工夫や再考の必要性がある。

輸液準備、輸液の滴下速度の計算・輸液の管理が必要だったと記載した学生もいた。このことから、「ただ実施する演習」から「意識して行う演習」へと意識づけなくてはならない。点滴準備の演習の段階で滴下速度の計算や輸液の管理について演習していたが、学生に意識づけ関連付ける演習方法の説明をしていく必要があったといえる。

### 4. 事前学習・演習への主体性の有無

事前学習について主体的に取り組めたかという問いに対して、3人の学生は主体的に取り組めなかったと回答している。このことは実習開始前の間に他の実習が予定されていたことや、他の実習終了直後成人看護学実習が予定されていたことなどから、事前学習が主体的に取り組めなかった可能性がある。他の実習期間との間隔に留意し事前学習を臨機応変に時期を早める工夫もしていたが、学生の次の実習へ向かうモチベーションを維持するための導入方法の工夫も必要となる。臨地実習前の学生に実習にあたっての不安要因を調査<sup>5)</sup>では「自分の知識」および「自分の技術」について不安を持っていた学生がほとんどであり実習前の学生に対し必要とされる知識の確認や事前学習のポイントをチェックする必要があると述べている。事前学習については、学生の主体性で実施していたものの知識の確認は不十分であった。今後は学生の知識の復習および習得状況にも留意し指導をする必要がある。

事前演習に主体的に取り組めたかという問いに対して「はい」と答えたものは18人全員であった。この主体性は演習後に続く実習が効果的になるためのスタートとして貴重なものである。自分で自分を伸ばせるところまで育てることが教育であり、「教え込む」のではなく自分自身で育つ力を身につけてもらう<sup>6)</sup>ことに配慮しながら学生の実習が効果的に行えるような関わりをしていきたい。

### 今後の課題

今回、学生がオリエンテーションの内容を十分に理解し、実施できているかどうかについて調査した。その結果、事前学習・演習のオリエンテーションでは、学生が事前学習や演習についての実施が十分でなかったことが明らかとなった。

教員は、提示した事前学習・演習の内容について、受け持つ患者の特徴と踏まえた具体的なイメージづくりや疾患および病態との関連づけ、それらに基づいた看護技術の提供ができるような説明の方法が求められる。

### 本研究の限界

本研究の対象は者18名と少数であり、この結果は一般化することはできない。

### 謝辞

本研究に、ご協力くださいましたA短期大学看護学科3年生のみなさまに心よりお礼申し上げます。

### 文献

- 1) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。2011.
- 2) 中山亜弓, 逸見英枝, 小野晴子他：成人看護学実習に向けての事前学習および学内演習の効果。新見公立短期大学紀要31, 139-145, 2010.
- 3) 上山和子, 岸理恵：小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習効果。新見公立短期大学紀要27, 49-56, 2006.
- 4) 上山和子, 岸理恵：小児看護学実習に事前演習を取り入れた学習効果—その2—演習プログラムを用いての縦断的調査一。新見公立短期大学紀要28, 15-21, 2007.
- 5) 掛屋純子, 岡宏美, 小野晴子他：学生が持つストレス・コーピングの傾向—臨地実習前の実態調査一。インターナショナル Nursing Care Research 8(2), 57-62, 2009.
- 6) 斉藤隆：相手を伸ばす教え力。宝島社, 東京, 202-293, 2005.

掛屋 純子・逸見 英枝

**The actual state and future issues of preparatory learning and practical training given  
before the adult nursing practice  
— Consideration of issues at institutes for nursing practices —**

Junko KAKEYA, Fusae HENMI

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study aims to show the actual state and future challenges of the preparatory learning and practicing at C hospital nursing practice given before the adult nursing practice. I sent out questionnaires about preparatory learning and practicing to 22 third year students who completed B hospital adult nursing practice for the A junior college, nursing department 2011 course in the previous semester. The results show that students got preparatory learning mainly about the diseases (heart failure, stroke, diabetes) of patients whom they were in charge of and preparatory learning about skills they got were also on these diseases. Likewise, in the practical training, they got a lot of blood transfusion trainings but only half of them got the trainings for application skills such as bed bath or foot bath for bedridden patients. After the nursing practice, some wrote that she should have practiced application skills. From these results, we can see the need of consideration about showing students the ways of practical training of applicable skills with images of patients at the orientation for the preparatory learning and about effective contents of practical trainings, and these remain to be solved.